

短 報

愛媛県における *Buchwaldboletus sphaerocephalus*  
(Barla)Watling & T.H.Liの分布記録

小林 真 吾\*

Distributional Records of *Buchwaldboletus sphaerocephalus*  
(Barla)Watling & T.H.Li the Boletaceae Fungi in Ehime Prefecture.

KOBAYASHI Shingo

**Abstract** : *Buchwaldboletus sphaerocephalus* (Barla)Watling & T.H.Li the Boletaceae fungi, was recorded in Imabari City, eastern part of Ehime Prefecture. Its locality is in the forest of Tsunashiki-shrine fronted on the Seto Inland Sea, surrounded by trees *Pinus thunbergii*, and *B. sphaerocephalus* occurs in the stump of *P. thunbergii*. *B. sphaerocephalus* is rare species in Japan, so it's necessary for conservation to observe habitats and collect ecological characters.

キーワード : *Buchwaldboletus sphaerocephalus*, イグチ科, 愛媛県, 新記録

**Key words**: *Buchwaldboletus sphaerocephalus*, Boletaceae fungi, Ehime Prefecture, Newly record

はじめに

*Buchwaldboletus sphaerocephalus* (Barla)Watling & T.H.Li は、担子菌亜門ハラタケ目イグチ科ザイモクイグチ属に属する菌類で、日本では確認例の少ない菌類の1種である。イグチ科の菌類はほとんどが菌根菌であるが、本種は材上から発生する木材腐朽菌であり、特に針葉樹の材木上に発生することが知られている。本種の発生記録は国内でもごくわずかであり、記載報告がなされていないことから正式な和名も付けられていない。本種の国内初見記録は1942年に滋賀県彦根市で確認されたものと考えられており、オオキイロイグチ(仮称)として記録された(青木・日本きのこ同好会, 2008)。その後、長らく本種の記録は途絶えていたが、2001年に兵庫県神戸市で発生が確認され、マツノキイロイグチという仮称が与えられている(小川ほか, 2004, 富山きのこ観察会, 2009)

*Buchwaldboletus sphaerocephalus*の特徴

前述の通り、本種の観察記録が少ないため、図鑑に記述されるような外見的特徴もまとめられていないが、兵庫県における名部らの詳細な観察によれば、本種の特徴は以下のようにまとめることができる(富山きのこ観

察会, 2009)。

- 発生基質：針葉樹の材上から発生。六甲山での観察例では再度公園内で切り倒されたマツの枯木上から発生。
- 傘：径3cmないし9cm, まんじゅう形から中高平らに開き, 色はレモン黄色, 湿っているときには粘性がある。
- 管孔：ほぼ直生で黄色だが青変性がある。孔口は多少角張り不規則となっている。
- 肉：色は傘表面より淡く, 肉質は充実しており, 変色性はない。
- 柄：棍棒状で, 下部に向かい太くなる傾向がある。色は傘と同じレモン黄色で, 古くなると褐色の細粒を帯びる。長さは3.5cmないし7cm, 太さは1.2cmないし2.2cm。また, 青木による観察による特徴は以下の通りである(青木・日本きのこ同好会, 2008)。
- 発生基質：針葉樹の材から発生。彦根での観察例ではスギの切株の根元に塊状に発生。
- 傘：径6cm, 鮮黄色, 光沢なく平滑, まんじゅうの皮のようで縁はやや内巻。
- 管孔：厚さ1.1cm。孔口は径0.5mmかそれ以下。
- 肉：黄白色, 厚さ1.2cmで芳香がある。緻密。
- 柄：長さ4cm, 径は上部で2cm, 下部は1.5cm。やや偏心, 中実で肉は硬い。内外の被膜はない。

\* 愛媛県総合科学博物館 学芸課 自然研究科  
Curatorial Division, Ehime Pref. Science Museum

## 愛媛での記録

今回、本種が確認された場所は愛媛県東部、今治市内にある綱敷天満宮の社叢である。2010年10月9日から11日にかけて、愛媛県西条市を主会場として日本菌学会の菌類観察会（愛媛フォーレ）が開催された。10月10日に県内各地で野外での観察・採集会が催され、本種と確認された。写真1は愛媛フォーレで採集された本種の標本、写真2はフォーレ開催の4日前、10月5日に撮影した本種の発生状況である。また、写真3は10月12日に綱敷天満宮から約2km北方にある唐子浜の松林に発生していたものである。綱敷天満宮ではマツの切り株上と、周囲の地中内にある植物遺物から発生した状態であった。唐子浜では、かつてマツの切り株があったとおぼしき場所で、地中の植物遺物から発生している状態が観察された。なお、現時点では愛媛県内における本種の標本および観察記録として引用できる文献は存在しないが、断片的な目撃情報がある。最も古い記録は約10年前のもので、愛媛きのご観察会会員の小川尚志氏により綱敷天満宮において材上生のイグチが観察されていたが、残念ながら標本や写真、観察記録の伴わない誤認情報として扱われてしまっていた。その後、平成17年（2005年）に同じ愛媛きのご観察会の沖野登美雄氏により、再び綱敷天満宮で観察された。このときには観察メモが残されており、「イグチの一種？ コメント：キイロイグチによく似ているが、腐木生が気になる。梅園の北、ベンチ付近のクロマツ（株）」と記されている。材上生のイグチという特異的な特徴を考えると、誤認する種はあまり考えられないことから、これらの記録は *B. sphaerocephalus* であったと考えられる。すなわち、今回の愛媛フォーレでの確認に至るまで、ほぼ10年間にわたり本種は同地で生育し続けていたことが類推され、発生環境として比較的安定しているものと考えられる。

## 菌類の発生環境の保全について

綱敷天満宮周辺は県内でも比較的規模の大きな砂浜海岸が続き、天満宮はその後背地であるクロマツを中心とした海岸林に立地している。同地では、県絶滅危惧Ⅱ類にカテゴライズされているショウロ *Rhizopogon rubescens* も確認されており、周辺に広がる海岸林は菌類の生育環境として保全上重要な場所と考えられる。近隣には、県の野生動植物保護条例に基づいた海浜植物の保護区が設定されているが、天満宮周辺は特別な保護体制が取られていない。希少動植物の保護施策の中でも地域や種の指定には様々な制約があり、特に民有地での保護区設定は困難である。さらに菌類の場合、保全のターゲットとなる種の生息環境を良好な状態で保つことが重要と思われる

るが、その方法論が確立されているとは言い難い。綱敷天満宮周辺の社叢は、数十年前までは低木や草本類が生い茂り、昼間でも通行がはばかれるような鬱蒼とした場所であったが、地元ボランティア団体により林床の管理が続けられている。今回発見された *B. sphaerocephalus* やショウロは、神社による社叢全体の管理に加えて、これらの林床管理によって安定的な発生環境が維持されている可能性が高い。

## おわりに

本種が認識されるようになった経緯は、兵庫での詳細な観察を行った名部らの研究に負うところが大きい。名部らによる記載の準備も進められており、その中で愛媛の産地も何らかの記述が加えられることが期待される。翻って愛媛県では、2003年にレッドデータブックが刊行されたものの改訂の動きは見られず、全県的なインベントリー作業は中断したままとなっている。現在、レッドデータブックの改訂が進行中であれば、本種は追加登録される可能性が高い。少なくとも改訂までの間は同地における発生の継続的な観察と周辺での発生追認が必要であり、場合によっては、このような発生環境を維持する活動が安定的に継続されるよう、補助体制など何らかの方策を検討する必要もあると考えられる。

改訂に向けた財政的な問題は如何ともしがたいが、インベントリーについては何らかの形で作業を進め、発表の場を確保しなければならない。また地域の自然に根ざしたタクソノミストが数や分野で大きな偏りがある地方では、インベントリーに携わる人材の発掘や育成も、改訂に関する大きな問題である。地域に根差したフィールドワーカーやパラタクソノミストの減少は、情報量の減少を招く。それに伴ってインベントリー作成が困難となると、生物多様性保全などの戦略を地域レベルで考えることが不可能となる。愛媛でも、その危機的状況は現実味を帯びつつある。

本稿は昨年報告に続き県内新産の菌類を記録したものであるが、その底意は、単に野外観察の重要性を伝えるだけではなく、わずかな情報の追加でも公的に刊行される場に発表し、その情報に多くの人々がアクセスできる環境を整えることにある。目録の刊行やRDBの改訂がままならない現状だからこそ、菌類に限らず多様な分類群において基礎的な資料の蓄積を継続的に行う必要があり、それは地方の自然史博物館が本質的に果たすべき役割である。

## 謝辞

本種が愛媛で確認された経緯を考えると、日本各地の

専門家が集まる日本菌学会の観察会が愛媛で開催されたことは非常に重要であった。この会が無ければ、愛媛での確認はもっと先のことになっていたに違いない。この観察会の誘致にご尽力いただき、本種の採集と同定に関わられた関係者に深く感謝申し上げます。また観察会にも参加されていた関西菌類談話会の名部みち代氏からは、本種の記載に関する重要な知見をいただいた。本稿をまとめるにあたって、愛媛きこの観察会の沖野登美雄氏には文献の閲覧の便宜を図っていただくとともに、過去の観察記録の引用も快く承諾いただいた。また同会の小川尚志氏による過去の観察情報も本稿をまとめる契機となった。以上の方々に対し、ここに記して厚くお礼申し上げます。

### 引用文献

青木実・日本きこの同好会（2008）：日本きこの図版 No.2031 オオキイロイグチ。日本きこの図版第5巻。名部みち代編。日本きこの同好会2。P119。

小川淳・伊藤光男・八田知之・田中敏嗣（2004）：神戸近郊のキノコ。神戸市環境保健所所報，33。pp.43-53。

Webサイト

Zipcodezoo.com： [http:// zipcodezoo.com/Fungi/B/Buchwaldoboletus\\_sphaerocephalus/Default.asp](http://zipcodezoo.com/Fungi/B/Buchwaldoboletus_sphaerocephalus/Default.asp) (accessed 2010/12/14)

富山きこの観察会：<http://sola.blog.ocn.ne.jp/photos/uncategorized/2009/09/21/dscn1681.jpg>(accessed 2010/12/14)



写真2 *B.sphaerocephalus*の発生状況 (Oct. 5, 2010 網敷天満宮)  
Ph.2 The locality of *B.sphaerocephalus* in Oct,5 2010, Tsunasiki-Tenmangu.



写真3 *B.sphaerocephalus*の発生状況 (Oct. 12, 2010 唐子浜)  
Ph.3 The locality of *B.sphaerocephalus* in Oct,12 2010, Karako-hama.



写真1 日本菌学会菌類観察会愛媛フォーレで採集された *B.sphaerocephalus*  
Ph.1 Specimens of *B.sphaerocephalus*, in Ehime Foray; ecuscation of Mycological Society of Japan.

